

# International Culture Appreciation & Interchange Society, Inc.



一般社団法人

海外と文化を交流する会

(一社) 海外と文化を交流する会 会報

2019年3月発行 第66号

おかげさまで当会は創立50周年を迎えることができました



ニューヨーク国連本部とユニセフ本部から招待状が届き  
日本ユニセフ協会副会長・田中峰子氏と共に渡米（1954年）  
ユニセフ本部会議場にて

- 目次
- ★ オーストラリアとの長年の文化交流で私たちがやっと理解できたこと (P2)
  - ★ チャリティーコンサートの感想を頂きました (P2)
  - ★ 次回チャリティーコンサートのお知らせ (P3)
  - ★ 「松岡朝物語」(仮称) 第14回 (P3)

## オーストラリアとの長年の文化交流で 私たちがやっと理解できたこと

先回の会報で、1977年に当会によって豪州へ寄贈された日本画巨匠の作品25点が、メルボルンの「ナショナル・ギャラリー・オブ・ビクトリア」から、豪州首都のキャンベラにある「ナショナル・ギャラリー・オブ・オーストラリア」に正式に移管されたことを報告しましたが、その移管に関する**正式な書類のコピーが当会まで届きました。**

日本画贈呈事業から約45年が経ち、ようやく豪州と日本との文化の違いの一端を強く納得するに至りました。文化交流においては、**日本側が行動を起こさなければ何も起きない**と、いう事を認識しました。こちらが行動を起こすと、とても喜んで向こうも動いてくれる国である、とわかりました。豪州との文化交流は、愛情と忍耐力を持ち、諦めないで、長いスパンで対応を続ける胆力が無いと実は結ばない国だと痛感したのです。(男性理事からは結婚生活の様だ、との声も・・・(笑))

これまでのいきさつの詳細は、2016年7月発行の第59号会報誌で既に報告済みとなっておりますので、当会のホームページ上のPDFファイルでお読みいただく事ができます。

## チャリティーコンサートの感想を頂きました

2018年12月7日に霊南坂教会にて開催されました当会主催のチャリティーコンサートは、大好評のうちに幕を閉じました。当日参加された方から感想を頂戴しましたので、ご紹介させていただきます。

- ◆ 数々のオペラのタイトロールを務められてご活躍の青盛のぼる様の艶やかな歌声を、まちかど伺うことの幸せをかみしめたコンサートでした。ハープと弦楽四重奏のすばらしさと共に満員の聴衆の方達も大満足でいらしたご様子でした。創立50周年という歴史の流れの中心にいらして活動されている松岡裕子様のご努力にも敬意を表したく思います。(会友 松本 純子)
- ◆ 初めて青盛のぼる様の歌声を拝聴させていただきました。弦楽四重奏とのお声に心地よい時間を過ごしました。飽きることもなく眠くなることもなく聴くことができるのは、素人ながら、素晴らしい音楽ゆえだと思います。またハープの音色の美しさにも魅了されました。素晴らしい演奏、そして霊南坂教会の礼拝堂が、青盛さんの柔らかい歌声をさらに美しく引き立てていたと思います。気持ちを豊かにくださった時間でした。バザーやコーヒーサービスも休憩時間を楽しんでくれました。チャリティーであることも嬉しいです。リピーターが多いことと思います。(会友 小倉 厚子)



## 次回チャリティーコンサートのお知らせ

テノール 大澤一彰 が歌う世界の名曲

日 時：11月1日 開演 6:30 (開場 5:30)

会 場：霊南坂教会

出演者：大澤一彰 西山昌子 有馬玲子 千年美奈子 間瀬利雄 梅田麻衣子

## 松岡朝物語(仮称) 第14回

### 第14回 笑顔——ユニセフに捧げた日々

文／角山祥道

66

1949年(昭和24)の年末、松岡朝はユニセフ駐日代表のストレーラー女史とともに、東京・板橋にいた。ユニセフの救援物資を配るためだった。

あいにく天候はすぐれず、早朝から雪が舞っていた。板橋は見渡すかぎり焼け野原で、煤けた色の上に、白い雪が降り積もっていく。

そんな中、配布場には300人を超える人たちが列を作っていた。傘を差している人は誰もいない。差したくても傘がないのだ。

配り終えた後、朝はストレーラー女史にお礼を言った。同じ日本人として、お礼を言わずにはいられなかったのだ。

「ミス松岡、お礼はいりません。これはユニセフを作った世界中の人々の“気持ち”、なのです。だから私にお礼はいりません」

この当時、日本には少なく見積もって40万世帯が着るものもないような貧困にあえいでいた。子どもたちは、メリケン粉の袋の底に首と手を出す穴を開け、それをかぶって、着物の代わりにしていた。靴など履いている子のほうが少なかった。

誰かが何かをしなければならなかった。そこにユニセフが手を差し伸べたのだ。

ユニセフは、40万世帯分の子どもたちの下着から上着まで全部、しかも男の子用、女の子用に分けて用意した。それを日本各地で配布したのである。

さらにユニセフは、子どもたちの食事にも注視した。まっとうな食事をとれているのか、不安視していたのだ。そこで手始めに、東京の小学校6校を選び出し、「新昼食プログラム」のモデル校にした。脱脂粉乳(通称「ユニセフミルク」)を提供したのである。脱脂粉乳は栄養価が高いだけでなく、保存性にも優れていた。ユニセフはこれを学校給食に取り入れたのである。これは「ユニセフ給食」と呼ばれ、以後、各地に広がって行く。ユニセフは1949年から1962年まで、脱脂粉乳の援助を行なった。

ストレーラー女史は、脱脂粉乳を配布するだけでなく、栄養士を派遣し、子どもたちの栄養管理に気を配った。さらに、脱脂粉乳がきちんと配られているか、自分の目で確認した。朝も何度かストレ

レー女史に付き添って、あちこちを回った。

巡回中、ストレーラー女史は決して日本語を話さない。日本語での日常会話に不自由しないのだが、それを隠し、視察先で担当者がどんな会話をしているか、チェックするのである。内緒話や取り繕った内容の話は、女史に筒抜けだった。ストレーラー女史が気にしていたのは、子どもの健康と幸せ、それだけだった。

ユニセフの援助——こうした衣食の無償提供によって、どれだけの日本人が救われただろうか。



新しい下着一揃えと上着一着ずつユニセフから頂いた児童は全国で41万世帯にのぼり、児童や親たちの喜びは大変なものでした

ユニセフには、毎日のように大量の手紙が届いた。どれも皆、ユニセフへの感謝の手紙だ。

朝は時間の許す限り、感謝の手紙をストレーラー女史に読んで聞かせた。

「ミス松岡、私は日本人に感心します。ユニセフは世界中の援助を待っている子どもたちに、何かできないかといういろいろやっています。しかし、こんなにたくさんの感謝の手紙を受け取ったのは、日本が初めてです」

「きっと感謝せずにはられないんです。私もそうですから」

ストレーラー女史は静かに微笑むと、居ずまいを正した。

「ミス松岡、前にも言いましたが、私にお礼はいりません。戦争によって迷惑したのは、お母さんと子どもたちです。私たちは、なすべきことをしているだけです。子どもたちは、服をもらったことなど、すぐに忘れてほしい。『誰かに恵んでもらった』という負い目や恥ずかしさを感じてほしくないのです」

朝は、中国・南京でのことを思い出していた。

貧しい人々のために設けた南京の「施粥廠」でのこと。ある時、8キロ先から歩いてきたという老婆がやってきた。6日間、何も食べてないという。彼女は食べ終えると、何度も頭を床に擦りつけた。

朝はこの時の戸惑いを思った。

自分はすべきことをしただけなのだ。お礼を言われる筋合いはない。なぜなら、彼ら中国人は日本兵から危害を加えられる側であり、日本は危害を加える側だった。同じ日本人として、そのことを放っておけなかった。だから、老婆の懇懃なお礼に戸惑ったのだ。

ストレーラー女史の戸惑いは、私と同じだ——。

女史の言葉は、朝の琴線に触れた。戦争が終わって、しばらく鳴っていなかった琴線だ。

朝は中国から戻ってきて以来、やることを見つけれないでいた。娘・裕子のために、たしかに「生活」はした。裕子の存在は人生の張りになったが、娘を育てることは当然のことであり、自分の人生の目的にはなり得なかった。裕子の人生をサポートしたいが、その人生は朝の人生ではない。

いったい自分は何をしたらいいのか。

朝の迷いの中心は、常にそこにあった。

だがストレーラー女史の言葉は、朝の暗く沈んだ心の内に、火を灯してくれた。この世には、助け

を必要としている人たちが大勢いる。困っている子どもたちがたくさんいる。私たちは皆、等しく “人間”なのだ。困っていたら助け合う。それが当たり前ではないか。

ユニセフはそのためにできた組織だ。そして今、戦争で傷ついた日本のために、手を差し伸べてくれている。

では、私は？

朝の中では答えが出ていた。

「ユニセフは、私のライフワークだ」

朝はこの時、これからの人生をユニセフに捧げようと決心したのだった。

67

1949年（昭和24）、この頃、街には靴磨きの少年や花売り娘で溢れていた。いわゆる「浮浪児」だ。全国には当時、約4万人の浮浪児がいた。彼らの8割は、家も親もいる「街頭児」だった。彼らの多くは、親の病気や失業のため、街に出て働かざるを得なかったのだ。彼らの靴磨きや新聞売り、花売りが一家の生計を支えていたのである。

〈こよなく晴れた青空を 悲しと思うせつなさよ〉

藤山一郎が歌った『長崎の鐘』（サトウハチロー作詞、古関裕而作曲）がヒットしたのもこの年である。

『長崎の鐘』は、長崎に原爆が落とされた当時、長崎医科大学（現・長崎大学医学部）助教授で、自らも被爆した永井隆が、その時の悲惨な様子を綴ったエッセイである。GHQの検閲により、3年もの間、出版が差し止められていたが、1949年に上梓されるやベストセラーになった。

このエッセイをモチーフにしたのが、藤山一郎の『長崎の鐘』である。作詞を担当したサトウハチロー自身も、弟を広島原爆で亡くしていた。この歌は、多くの日本人の共感を誘った。戦争で身内を亡くしていた人間にとって、澄み渡った青空さえも悲しく切なかつたのだ。

一方で、日本人が「悲しい」とようやく口にできるようになったと言えるかもしれない。

同年に出版された『きけわだつみのこえ』もベストセラーとなった。これは、全国の各大学、高等専門学校から集まった、第二次世界大戦の学徒出陣兵の遺稿集で、戦没学生75名の日記、手記、書簡などが収められた。夢を抱きながらも戦場に向かわざるを得なかつた彼らの苦悩や悲痛な叫びは、日本人の心に響いた。

「わだつみの悲劇を繰り返すな」

この言葉は若い人間たちの平和の合い言葉となった。

政治・外交においては、混乱が続いていた。日本はまだ講和条約を結んでおらず、国際的には独立国として認められていなかった。国会では、アメリカとの単独講和でいくべきか、全面講和を目指すべきか、結論はでなかつた。

明けて1950年（昭和25）1月、日本のユニセフ活動において大きな出来事があった。任意団体として日本ユニセフ協会が発足したのだった。

ユニセフ駐日代表部は、日常の業務に追われ、日本各地から寄せられる礼状や写生画などを整理できないでいた。また、礼状を英訳しようと思っても、人手が足りなかつた。そこでユニセフは、日本国際連合協会に支援を求めた。同協会の呼びかけによって、多くの女性ボランティアが集まった。

朝は、そのボランティアと共に、日本ユニセフ協会を立ち上げたのだ。

問題は、資金調達だった。必要なのは、活動拠点となる事務所と活動資金だったが、どちらも少なくないお金が必要だった。そこで朝は、「お茶会」を企画した。募金を募るためのお茶会である。

最初のメインゲストとして招待したのは、マシュー・リッジウェイ夫人である。マシュー・リッジウェイ氏は、マッカーサーのあとに赴任した連合国軍最高司令官である。リッジウェイ夫人はとても協力的で、多くの募金も集まった。

朝は、協会を確かなものにするため、以前から懇意にしていた田中耕太郎氏の夫人——峰子夫人のもとを訪れた。峰子夫人に、協会の副会長に就任してもらうためである。朝の友人でもある田中耕太郎氏は、第1次吉田茂内閣で文部大臣を務めた法学者で、この時、参院議員を辞め、最高裁判所長官となっていた。その後、氏は国際司法裁判所（ICJ）判事も務める。

峰子夫人は、承諾にあたって唯一の条件をつけた。

「朝さん、ユニセフに残りの人生を捧げることが出来ますか？ それならばお受けします」

これは朝にとって、幸せな誓約だった。もとより、そのつもりなのだから。

会長は、佐藤尚武氏にお願いした。

氏は戦前、国際連盟帝国事務局長や駐ベルギー特命全権大使を歴任した外交官で、日本が国際連盟を脱退した際の代表団のひとりである。氏自身は後年、〈連盟を脱退して世界で孤立するという事は日本の利益ではないと確信して〉（『回顧八十年』時事通信社）いたが、世論と世界の流れには逆らえなかった。その後、1937（昭和12）年、「協調外交」や「平和、平等の立場を前提とした話し合いによる中国との紛争解決」を条件に、林銑十郎内閣の外相に就任するも、軍部や右翼から「軟弱外交」と批難され、林内閣自体も在任123日の短命に終わった。

佐藤尚武氏は、この当時、参議院議長の要職にあった。外交官であり平和を愛する佐藤氏は、朝が考えるユニセフの会長職にぴったりだったのだ。

朝自身は、メンバーに押され、常任幹事に就任した。

以後、日本ユニセフ協会は、フランクリン・ルーズベルト夫人を招いた「お茶会」を企画するなど、精力的な活動を続けていく。

68

1953年（昭和28）の年末、いつもより寒風が肌を突き刺す日に、日本ユニセフ協会のもとをある女性が訪ねてきた。

彼女は、「奄美諸島婦人クラブ」の代表だった。

「どうか助けてくださいませんか。奄美は、土地が痩せていて、お米が十分に収穫できません。島に住む子どもたちには栄養が行き渡らず、痩せ細っています」

前年にサンフランシスコ講和条約が施行されたことを受け、それまでアメリカの占領下にあった奄美群島は、1953年12月25日に日本に返還されたのだった。奄美は、土地が痩せているだけでなく、米軍基地がないことから、アメリカの資金もなかなか入って来なかった。さらに本土と分離されたことで、主産業だった農作物の販売経路は途絶。経済は壊滅的となった。島民は自給自足を余儀なくされ、飢餓寸前とっていい状態だった。

対応した朝に、協会の首脳部に相談している余裕はなかった。

独断で支援を決めると、その資金援助のため、映画会を企画した。チャリティー映画会である。朝は、その日のうちに映画会社をいくつも回り、必死に説いて回った。すると、アメリカの俳優ダニー・ケイが主演した『アンデルセン物語』の上映を企画している会社を見つけた。その会社は、朝の熱意にほだされ、チャリティー映画会の企画に同意してくれた。

この時、朝は知る由もなかったが、翌年の1954年、ダニー・ケイはユニセフの親善大使に就任す



る。

映画会開催の目途はついたが、今度はチケット販売が問題だった。売ってくれるボランティアが必要だった。この難問を解決してくれたのは、副会長の田中峰子夫人だった。夫人は、前から知り合いだという「あけの星会」と引き合わせてくれたのだ。夫人はこの常務理事を務めていた。

あけの星会は、1935年（昭和10）発足のカトリック系の社会事業団体で、孤児院などを運営していた。会長は、麻生和子さん（麻生太郎元首相の母）。吉田茂元首相の三女で、首席の私設秘書を務めたこともある才女だ。石橋湛山元首相夫人のうめ夫人や常務理事の伊集院功子さんも、日本ユニセフ協会の提案に賛同し、チケット販売に尽力してくれた。高校生になっていた娘の裕子も、映画会当日には、プログラムを配ったりと立ち働いた。

これら収益を用いて、1954年（昭和29）9月より、日本ユニセフ協会による奄美支援が始まった。奄美群島には、支援を必要とする7万人を超える子どもたちが待っていた。

奄美の緊急支援に動いてくれたのは、それだけではなかった。ユニセフ本部が協力してくれたのだ。

朝はひょんな偶然から、ユニセフ・アジア地域事務所長だったキーニー氏が主宰するカクテル・パーティーに出席した。朝は、キーニー氏が「子どものために、できることは何でもする」と日頃から口にしていたことを知っていた。そこで思い切って、パーティーの席上で、奄美の窮状を訴えたのだ。それは、ルールに反したことであり、奄美支援は、キーニー氏の権限の範囲を超えていたことも知っていた。だがこれは、私利私欲のお願いではない。目の前に、飢えかけている子どもたちがいるのだ。

「奄美の子どもたちのために、脱脂粉乳を供給していただけないでしょうか」

朝の頼みに対し、キーニー氏は間髪を入れず聞いてきた。

「その子どもたちが普通の子と同様に成長できるようになるには、何年ぐらいのミルク支給プログラムが必要でしょうか」

朝は、医療の専門家ではなく、はっきりとしたことは言えないが、と断りつつ、「少なくとも3年は必要です」と答えた。

ユニセフの脱脂粉乳の無償支援は、1956年から3年間の予定で始まったが、実際、このプロジェクトは7年続いた。

のちに、キーニー氏は朝に漏らした。

「ミス松岡、あなたは行動を起こさずにはいられない人ですね。そして皆を巻き込んでいく。もちろん私もそのひとりですが」



1954年、朝のもとに、ユニセフ協会（ユニセフ国内委員会）の設立に奔走したモーリス・ペイト初代ユニセフ事務局長から招待状が届いた。ニューヨークの国連本部とユニセフ本部に招待する内容だった。ユニセフに加盟する各国は、それぞれ国内委員会を立ち上げていた。国連未加盟の日本は、ユニセフに加盟できていなかったが、任意団体日本ユニセフ協会は、いずれ国内委員会の役割を担う団体として、期待されていたのだ。

だが問題はお金だった。

任意団体の日本ユニセフ協会は、手弁当での活動だった。朝は、アメリカ人にマンツーマンで日本語を指導するなどして生活費を稼いでいたが、アメリカ行きの旅費を捻出する余裕はなかった。もち

ろん、日本ユニセフ協会にもそんな余裕はない。

困った朝は、アメリカの友人に相談した。すると、その中に気前よく 1000 ドルものお金を用意してくれる人がいた。日本人はまだ、ドルの所持を認められていなかったのである。さまざまな人々の善意と煩雑な手続きを経て、朝と田中峰子副会長の二人は、ようやく、サンフランシスコへ向かう飛行機へと乗り込んだ。朝にとっての初フライトだった。

国連本部の 24 階にあるユニセフ本部で、朝はモーリス・ペイト事務局長に会った。

彼は背が高く、シルバーグレーの髪が特徴的だった。眼鏡の奥の目は、いつもやさしい微笑みを称えていた。

ペイト氏は、ユニセフを立ち上げる際、「飢えに苦しむ子どもたちに 1 日 1 杯のミルクを」というスローガンを訴えたが、飢えに苦しんでいる多くは、敗戦国の子どもたちだった。ゆえに、「連合国の敵であったから援助は不要」と大反対された。だが、そういう人々を、「子どもたちの中に敵はいない」と説得したのだった。

ペイト氏は、朝に対し、日本でのユニセフの活動について熱心に質問した。氏との話の中で出たのは、募金の重要性だった。

「ユニセフ活動を活発化するために、募金活動をすべきでしょう。どんな形のものでもいいのか、それはミス松岡、あなたに任せます」

朝は、募金を立ち上げた暁に、日本で集まったお金の半分をユニセフに送金することを約束した。半分は日本、半分は世界で。それが朝の考えだった。

## 69

昭和 30 年代に入ると、日本は活気を取り戻し始めた。事実、1 人当りの実質国民総生産 (GNP) が、1955 年 (昭和 30) に戦前の水準を超えたのである。俗に言う「神武景気」も始まり、家電を中心とする耐久消費財がブームとなった。裏を返せば、各家庭で家電が買える時代が到来したということである。電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビは「三種の神器」と呼ばれ、人々の購買意欲を喚起した。

この頃、ラジオやテレビを賑わせていたのは、この CM ソングだ。

「明るいナショナル 明るいナショナル～」

松下電器 (現・パナソニック) のイメージソングである (三木鶏郎作曲)。「明るい」という言葉にすでに違和感はなくなっていた。力道山を見ようと、街頭テレビに人々が群がり、街には自動車の数が増えた。美空ひばり、江利チエミ、雪村いづみの「三人娘」が人気となり、クレージー・キャッツがお茶の間の人気者になっていく。石原慎太郎は『太陽の季節』を引っ提げ文壇にデビューし、太陽族ブームが巻き起こった。サングラスにアロハシャツが定番のファッションで、彼らは享樂的に人生を謳歌した。

翌 1956 年 (昭和 31) になると、経済企画庁は『経済白書 日本経済の成長と近代化』の結びで「もはや戦後ではない」と記し、この言葉は流行語となった。日本人は「戦争、を忘れてしまったのである。

そんな中、任意団体・日本ユニセフ協会は、さらなる発展を遂げる。同協会を発展させる形で、1955 年 (昭和 30) 6 月、財団法人日本ユニセフ協会が設立される。初代会長には引き続き、佐藤尚武氏。副会長には、田中峰子氏が就いた。朝は、専務理事に就任する。専務理事はいわば、国連における事務局長にあたる立場で、実質、引き続き協会を朝が運営することとなった。

この時、多大なバックアップをしてくれたのが、実業家の石橋正二郎氏 (ブリヂストン創業者) だった。氏は、協会の事務所も提供してくれた。



「戦後の苦しかった時期に、日本が諸外国からいただいた善意をお返ししないといけない」  
佐藤尚武氏のこの言葉に、石橋氏が応えたのだ。石橋夫人の石橋昌子氏も財団法人日本ユニセフ協会の設立に最初から参加した。

〈社会への貢献が大きければ大きいほど事業は繁栄する〉  
〈生活向上に役立ち、人の幸福を増す製品をつくるのが成功の基である〉  
石橋正二郎氏の言葉である。氏にとって、社会貢献は生きる目的でもあった。

では、どうやって「善意をお返し」するか。

すぐに手がけたのが、「10円学校募金」(ユニセフ協力募金)だった。これは、朝とモーリス・ペイト事務局長との約束でもあった。

朝はまず、東京都の文化庁の局長を訪ねた。ユニセフ募金のキャンペーンを学校で行なうことができるかどうかを聞くためだった。だが局長いわく、「文部省は学校での募金を禁止している」ということだった。

「しかし例外が認められるかもしれません。以前、広島や長崎の原爆被害者の方々を支援する募金を小中学校で行なったこともあります。何人かの学校長を紹介しますから、話し合ってみてはどうでしょう」

だが局長が集めてくれた5人の学校長は、ユニセフ自体に興味を持っていないようだった。朝は、これまでのユニセフの活動を必死に説明した。朝は、雪の日に板橋で行なった救援物資の話をした。すると、ひとりの校長が、急に顔を上げた。

「あれはユニセフの活動だったのですか？ 私の学校の子どもたちの何人かは、あの日、板橋で服をもらい、たいへん喜んでいました」

校長はその時の子ども様子を事細かに説明した。すると、雰囲気が一変した。校長たちは皆友好的になり、日教組を訪ねるようアドバイスをくれた。

日教組の委員長が時間を割いてくれた。当時の委員長は小林武氏で、こののち、参院議員に転出する。

小林委員長は、終始穏やかだった。

「私自身は単にひとりの教師です。教育の目的は、すべての子どもたちを援助することです。日教組はそのために共に働いています。あなたがたがもし公立小学校の中で、ユニセフ基金の募金を立ち上げることを希望なさるなら、私たちは何も反対することはありません」

ここからは、忙しさの中に放り込まれた。各県の教育委員会や、教育界の重鎮と呼ばれる人たちに、せっせと手紙を書いて送った。パンフレットやポスターを印刷し、それぞれの教育委員会に送った。

多くの人たちは賛同してくれたが、それでも中には、「日本にも困っている子どもがいるのに、外国まで手を伸ばす必要はあるのか」という辛辣な声もあった。

朝の頭の中には、日本の子どもたちが送って来た多くの感謝の手紙の存在があった。彼らは、わかっている。「感謝の気持ち」を示す機会さえつくってあげれば、彼らはきっと応えてくれるのではないかと。

結果は上々だった。

ユニセフ執行委員会のペイト執行局長からは早速メッセージが届いた。

「……世界の他のところにいる困っている子供たちを助けようとして、日本の子供たちへ呼びかけた貴協会の方々の仕事は、ユニセフをより一層よく周知させ、その支持を得るために最も实际的で、効果的な方法であり、貴協会の価値ある努力に、われわれは強力な支援を送ることを確約したいと思います」

	年度	参加学校件数	募金総額
第1回	1956年	3976	1251万746円
第2回	1957年	6087	1698万9258円
第3回	1958年	4170	1309万2282円
第4回	1959年	3690	1083万7625円
第5回	1960年	6555	2093万7028円

(『子どもたちの笑顔のために ユニセフと歩んだ50年』出版文化社)

釜石市立白山小学校の子供会長からはこんな手紙が届いた。

「ぼくたちは、日本人の不幸な人たちを助けるというような気持ちがみんなにあって、このユニセフに協力しました。みんなは自分の小遣いから少しずつこのユニセフに協力してくれました。日に日に、きふ金がたまってきて、最終日にはこのくらいたまりました。そしてこれを不幸なお友だちに、そうして日本中の人たちが、又世界中の人たちが、幸福になるように、みんなのっています」(1958年10月「ユニセフニュース 第5号」)

募金活動は、日本の子どもたちに「助け合い」の精神を根付かせただけではなかった。朝自身が、より「世界の子どもたち」に目を向けるようになったのだ。自分の国のためだけでなく、世界のために心をくだく。このスタンスを朝は最後まで貫き通すことになる。

朝は募金活動の他に、品物を送る活動も行なった。

朝は韓国の惨状に心を痛めていた。1950年(昭和25)年に勃発した朝鮮戦争は、朝鮮半島の子どもたちを追い込んでいた。1953年に休戦したものの、戦火の爪痕はひどく、学校現場では備品が足りず、授業もままならないということだった。もとはといえば、日本の植民地が遠因で始まった戦争にもかかわらず、日本はこの戦争で特需を得、経済を立て直した。一方の朝鮮半島は、苦しみの真っ只中にある。

朝は、東京の公立学校に声をかけた。学校用品の中で、使っていないもの、数を減らしても差し支えないものを寄付してくれるよう呼びかけたのだ。すると、80万点もの備品が集まった。これらは、ユニセフの団体を通じて韓国に届けられた。

1965年(昭和40年)6月に「日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約」が結ばれ、国交が正常化するまで、日本から韓国に直接物を送ることは難しかった。実は、サンフランシスコ講和条約の会談と同年に、日本と韓国も会談を行なったのだが、日本側が「日本は朝鮮でよいこともした」と失言したため、会談が長く中断されていたのだ。植民地支配の謝罪や補償を要求する韓国と、それを拒否する日本との間で綱引きが続き、国交が回復するまで、戦後20年かかってしまったのだ。

朝たちユニセフ協会のもとには、韓国の教育部長官(日本の文科相)からの感謝状が届いた。これは、戦後、韓国の政府から日本に送られた最初の正式文書ではないか。

すべての人々は、福祉に関心を持ち、助け合うべきである——このことを肝に銘じるため、この感謝状はしばらく協会の壁に飾られていた。

1957年(昭和32)、機関誌「ユニセフニュース」の発行がスタートした。記念すべき第1号は、1957年5月に発行された。定価は1部10円。編集発行人は、松岡暁美。これは朝のことだ。朝はこの頃より、ペンネームとして「松岡暁美」を使い始める。

第1号1面には、「日本の国連加盟なる」という見出しが踊っている。日本は、前年の12月18日、

国連総会で国連の加盟が承認されたのだ。1933年の国際連盟脱退から、23年目の復帰だった。日本がようやく国際社会の一員として認められたことが、朝には何より嬉しかった。

50年代後半は、国際社会復帰を祝うかのような出来事が目白押しだった。

1957年には東京都の人口が851万人を突破し、世界一となる。

翌1958年には、長嶋茂雄がプロ野球に新風を巻き込み、東京タワーの建設も始まった。333mは、当時世界一だった。

1958年には、皇太子と美智子皇太子妃の成婚パレードに人々は酔い、同年、東京オリンピックの開催が決まった。

ジェームス・ディーンやヒッチ・コックなどの洋画ブーム。エルビス・プレスリーによるロカビリー・ブームにポール・アンカ。テレビでは『名犬ラッシー』に『ローンレンジャー』、アニメの『ポパイ』。50年代後半は、アメリカから入って来た文化を享受し続けた時代ともいえる。

日本人は、急激に世界を身近に感じるようになっていた。

日本ユニセフ協会にとっても、アメリカのスターの存在は大きかった。ダニー・ケイだ。

1961年（昭和36年）、ユニセフをPRするために、ユニセフ親善大使のダニー・ケイ氏が初来日を果たしたのだ。ユニセフ・アジア地域事務所長、キーニー氏の肝いりで開催される「ユニセフ・アジア子ども祭り」に参加するためだった。

朝は、モーリス・ペイト事務局長を通じて、ダニー・ケイに協力してもらえないか、ずっと打診していたのだ。ダニー・ケイ氏は東京のテレビ番組への出演にも快く応じてくれた。

一週間の滞在だったが、その振る舞いは、「映画スター」としてのものではなかった。ひとりの人間として、真摯に子どもと向き合ってくれたのだ。滞在中、テレビ出演の要請や取材要請は引きも切らなかったが、ダニー・ケイ氏は、ユニセフの宣伝になること以外は決して引き受けなかった。余談だが、ダニー・ケイ氏のユニセフ親善大使としての活動は、1987年に永眠するまで続けられた。現在、ユニセフの表彰する「ダニー・ケイ人道平和賞」に彼の名は残されている。



日本工業倶楽部にて

「ユニセフ・アジア子ども祭り」に出演中のダニー・ケイ氏  
(1961年、アメリカの人気喜劇俳優ダニー・ケイが初代ユニセフ親善大使として来日)



米国大使公邸にて

右から  
ダニー・ケイ  
ライシャワー米国駐日大使  
ライシャワー大使令嬢  
松岡 朝  
ライシャワー大使夫人

ダニー・ケイ氏と触れあう日本の子どもたちの瞳は輝いていた。

この瞳の輝きを失わせてはいけない。

朝は改めて思い直していた。

病気、飢餓、貧困、無教育……。こうした状態はどの国でも、戦前までは「当たり前」だった。だが、これらは当然であっていいはずがない。

「こんな時代は、もう終わりにしたい」

朝はユニセフの活動を通して、その思いを強くしていた。

物質、経験、知識。残念ながら、これらは国や地域によって偏りがある。だが、これを分け合ったらどうだろうか。物だけでなく、経験や知識も「教え合う」ことで、分かち合うことができるのだ。共に分かち合おう、という自覚が、その国の生活を変えていく。

朝は子どもが何よりも好きだった。

街中で子どもが母親から叱られ、泣いているのを見かけると、理由も聞かずに飛んで行って、その子の代わりに母親に謝った。娘の裕子が幼かった時には、たとえ疲れて帰ってきても、毎晩、英語で書かれたアンデルセンやグリム童話を、ベッドの中で日本語に訳して、読み聞かせた。

裕子にとっても、朝は間違いなくただひとりの「ママ」だった。ただ友だちの母親より少しだけ——正確に言えば20歳以上も歳が上だったので、友だちの目にどう映るか、秘かに心配していたのだが……。そのことを除けば、裕子にとっても朝は、「尊敬できる人間」だった。そのことは幼い裕子にとっての誇りだった。

ただし誰にでもニコニコしているような、マザーのような人かという、そうではない。外国生活が長かった朝は、正しいと思ったことを、それが見知らぬ人に対してでも主張するのだ。相手が目上であっても、それは変わらない。朝にとっては、遠慮することのほうが、相手に対して失礼だという考え方なのだ。たとえば、プレゼントされたものでも——それは親しい間柄に限られたが——必要のないものであれば、辞退してしまうこともあった。

人づきあいもしっかりしていた。朝にとっての知己とは「自分が尊敬できる人」に限られた。尊敬できないのに、あたかも尊敬しているように振る舞う——敬して遠ざけるということができなかった。ユニセフから帰ってくるとよく、「今日は疲れた、嫌な人に会った」と娘の裕子にこぼした。

こうした朝の性格は、初期の日本ユニセフ協会にとっては、推進力となった。一方で、軋轢もあった。それでも朝は気にせず、突き進んだ。それが「子どもたちの幸せ」になると思えば、どんなこと

でも厭わなかった。心に思っているだけではだめなのだ。行動しなければ、何にもならない。朝はそう確信していたのだ。

財団法人になってからは、多少の給料が出るようになっていたが、朝はそれをあてにはしていなかった。相変わらず、アメリカ人相手の日本語の家庭教師を続けるなどして、生活費を稼いでいた。そして空いた時間のほとんどを、ユニセフに捧げていたのである。

唯一の気がかりは、娘の裕子だった。

裕子に寂しい思いをさせているのではないか。

そう思った朝は、裕子がある程度成長すると、できうる限り、ユニセフのイベントに連れて行った。自分が見てきた世界を、娘の裕子に見せたいという思いもあった。

裕子は裕子で、実母に言われた言葉を忘れないでいた。

「これからは、どこへ行くにもおばちゃん（朝）についていくのですよ」

裕子は、朝に対して素直だった。朝の愛は、裕子を素直な子どものままでいさせてくれたのだ。

この頃の朝の行き先は、日本国内にとどまらなかった。協会の専務理事として、1957年から毎年のように、ニューヨークの国連本部で開催されるユニセフ執行委員会に出席した。執行委員会への出席は、朝がユニセフを辞めるまで続いた。アメリカで博士号をとったことが、ここでは役立った。彼らは「博士」として朝を尊重してくれたのだ。



1956年12月18日、日本の国連加盟が実現し、1957年以降ニューヨークの国連本部でのユニセフ執行委員会に日本ユニセフ協会も出席できるようになった。

1958年（昭和33）のことだ。

娘の裕子は、ずっとアメリカへの留学を希望していた。朝は、執行委員会に出席するついでに、裕子をオハイオ州のウースター大学へと連れて行った。ここの学長は、ドクター・トイシといい、朝のコロンビア大学時代の学友だった。トイシ博士は、「朝の娘なら」と、奨学金を出してくれることを約束してくれた。

裕子をウースター大学へ残し、朝はニューヨークへと向かった。執行委員会に出席したものの、どうも調子が悪い。たまたま、朝の友人の子息がニューヨークで医者をしており、朝は診てもらうことにした。

「何かお腹にしこりがありますね」

医者は顔を曇らせた。

精密検査を受ける。胃に腫瘍があった。

「ミス松岡、このあとの予定はすべてキャンセルし、すぐに日本へ戻りなさい。かなり大きな腫瘍です。悪性ではないと思いますが、一刻も早い手術が必要です」

だが帰国するわけにはいかなかった。朝は、日本政府の代理としても国連に来ていた。



「私は日本政府の派遣でこの地におります。役目を終えずに、おいそれと帰国するわけにはいきません。もし事態が急変し、腫瘍が破裂したとしたら、それが私の運命なのでしょう。甘んじて受けます」

医者はしばし考え、言葉を継いだ。

「私は医者です。人の病気を治すためにいます。そしてこの病院には、多くの若い医師が学んでいます。朝の腫瘍は大きく、特別なものです。朝の手術に立ち会うことはきっと、若い医師にとっても勉強になるでしょう。勉強という名目で、あなたを特別に手術することも可能だと言うことです」

「ありがとうございます。そうしていただければとてもありがたいです」

すぐに手術日が決まった。

朝7時に、手術室のベッドに寝かされた朝は、「とうとうここまで来てしまった」と思った。あとは運を天に任せるしかない。朝は麻酔医の注射で眠りに就いた。

目を覚ますと、手術室の天井の色と違う色の部屋にいた。

隣で医者が、朝の血圧を測っている。

「私の手術はこれからですか？」

「何を言ってるんです。昨日終わりましたよ」

「昨日？」

「ええ、そうです。無事手術を終え、今、あなたが目を覚ますのを待っていたのです。今、あなたが寝ているのは回復室で、目覚めたら、病室に移ることになっていたのです」

朝は、頭が混乱したままだったが、そのまま素直に病室に連れて行かれた。

一週間して自分の足で歩けるようになると、朝はようやく、生きているという実感が湧いた。

「ああ、神様。神様が私をお救いくださった」

朝の目に、自然と涙が溢れた。

朝はずっと、アメリカで親切にされてきた。第二の故郷とも呼ぶべきこの地で救われたということは、そうなるように神様が定めてくださったのかもしれない。

生きている。

朝は思った。

だったらこの命を子どもたちのために使おう。子どものために尽くそう。

「これが私の進むべき道だった」

気づくと朝は、ベッドの上で声を出していた。

「落ち込むこともあった。嫌なこともあった。でもこの道は、神様が私を導いてくださった道。私は日本、アメリカ、そして中国と3つの国で生きてきた。そして今、世界の子どもたちのためにこの場所にいる。神様、どうか子どもたちを祝福してください」

翌年、朝はまたニューヨークの国連本部に出かけた。ユニセフ執行委員会に出席するためだ。朝に「休養する」という言葉はなかった。

1959年(昭和34)9月11日、ニューヨークで開かれたユニセフ執行委員会で、朝は演壇に立ち、日本の活動を報告した。

「ユニセフ執行委員会の会議に再び日本ユニセフ協会を代表して演壇に立ちますことは非常に光栄に存じます。

私どもの協会は募金運動をずっと続けておりまして、今年の募金運動で出来るだけユニセフに拠出する額を増やしたいと目下懸命の努力を行っております」(1959年10月「ユニセフニュース 第9号」)

そのニュースは、ニューヨークのユニセフ本部から電報という形で送られた。そこにはこうあった（昭和40年「ユニセフニュース 第36号」）。

「ユニセフに在るわれわれは、本日ユニセフに対して贈られる一九六五年度ノーベル平和賞の榮譽を、貴協会の皆さんと共に頒ち合うことを喜び、このことが、故モーリス・ベイト氏の才腕と貴協会の厚意ある支持により始められたこの大事業にさらに一層の力を与えてくれたことと信じます。

ヘンリー・R・ラブイス  
ユニセフ専務理事」

1965年（昭和40年）10月26日、この年のノーベル平和賞に「ユニセフ」が選出されたのだった。

これは朝たちにとって願ってもないニュースだった。世界の子どもたちを助け合いの精神で守っていこうという取り組みが、認められたのだった。

ユニセフ専務理事のラブイス氏は、受賞の挨拶でこう語った。

「われわれ大人が常にわれわれ自身に「われわれの社会は、われわれの子どもたちに平和のための武器を備え得るすべてのものを果して為しているか。またはしていないか」と質問しなければならないのは、富める者も貧しい者も、低開発国ばかりでなく、すべての国でも行なわれなければならないのです」（昭和40年「ユニセフニュース 第36号」）

自分たちは子どものために尽くしているか。そう自問自答せよ、とラブイス氏は世界中の人々に語りかけたのだった。

こんな日が来るなんて。

朝はラブイス氏の挨拶を特別な思いで聞いた。ストレーラー女史のもとでユニセフに関わってから16年。朝は身も心もユニセフに捧げていた。朝は70歳をとうに過ぎていた。この出来事は区切りなのではないか。朝の中にふとそういう気持ちが浮かんだ。

1966年（昭和41）6月、日本ユニセフ協会では役員改選が行なわれた。朝は、この時をもって正式に日本ユニセフ協会から離れた。

(つづく)



## 会費納入のお願い

年会費納入をお願いいたします。子ども達に、より良い日本を残すための当会の活動内容は現在まで高く評価されて参りました。これも皆さまのご理解があればこそでございます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

日本にあるものはオーストラリアには無く、オーストラリアにあるものは日本には無いと言われており、友好を深め、相互協力を推進することが重要な意味を持つ関係にあります。日豪両国の芸術専攻生の教育交流の発展や、オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展の実現を通して、相互協力関係の深化を図りたいと思いますので、是非ご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 一般社団法人 海外と文化を交流する会  
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 渋谷支店(普) 0026193 海外と文化を交流する会  
会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

### 海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインヒル内  
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail: official@kaigai-bunka.org  
<http://www.kaigai-bunka.org>